月　刊

Mélange

VOL.86

2013.10.27

詩と評論

月刊「Mélange」VOL.86　2013/10/27

月刊「Mélange」編集部

「月刊めらんじゅ」86号目次

詩

花火大会……岩脇リーベル豊美 4
生命（いのち）……にしもとめぐみ 5
二つの塊……中堂けいこ 6
砂上の楼閣に住むもの……有時秀記 7
変容　焼肉弁当の哀しみ……富 哲世 8
やわらかなフルーツ……月村 香 9
連想ゲーム4……野口 裕 10
いろといろ……大橋愛由等 12
八つの方位からの声の無性格さについて……高谷和幸 13
耳をすませると……川田あひる 14
十三夜……上野 都 15
客車……寺岡良信 16
海山のあいだで……木澤 豊 18
あとずさる……福田知子 19

エッセイ

映画評「台湾アイデンティティ」「メキシカンスーツケース」……安西佐有理／大橋愛由等 3
〈詩人通りより〉8「故郷についての―反時代的考察」……岩脇リーベル豊美 17
〈神戸詞（うた）あしび〉75「詩人が見た夢のありか―追悼・鈴木孝氏」……大橋愛由等 20

編集部だより★07／第86回「Mélange」読書会発表担当は、私・大橋愛由等でした。今年8月に亡くなった詩人・鈴木孝さんの長編詩集『泥の光』（2000年）を取り上げたのです。これに先立つ7日に姫路「カフェ・エクリ」で、76歳の人生を終えた鈴木氏の詩業について、20歳に出した第一詩集から晩年の詩作品（詩誌「宇宙詩人」に掲載）を俯瞰するスタイルで発表しました。この発表を踏まえて、「Mélangee」の読書会では、鈴木氏の詩業の集大成とも言うべき詩集『泥の光』（2000年）にスポットをあてて、語ったのです。参考文献は、『鈴木孝詩集（新・現代詩文庫98）』（土曜美術社出版販売））。（大橋記）

映　画　評

「台湾アイデンティティ」

（酒井充子監督、2013）

安西佐有理

ひたすら個の語りだからこそ、歴史が立ち現れる。語られるのは、台湾、日本、インドネシアで記録された、台湾の日本語世代のお年寄り達自身の人生。第二次世界大戦、二二八事件や、世界最長三八年間の戒厳令の時代をくぐり抜けた日本語は、単に「流暢」というのではない「うつくしさ」―端正で、目の前の相手を慮りつつ記憶や願いをつむぎ、語られないことの広がりまでも想起させ、それぞれの何かへの慈しみを持って発せられる、強さと切なさでできたことばだった。母語かそれ以外という区分からはこぼれ落ち、習い覚えた言語圏の国や歴史文化を肯定するか否かという単純な議論には収まらない、自らの一部となってしまった言語。異なる言語ごとに紐づきながら縒り合される記憶、感性。

日本統治とその帰結、当時や戦後の日本人の態度について一面的でない政治的倫理的判断が台湾にも日本にもあるとして、映画は、台湾人や先住民と一括りにしえない個々人の生が先ず絶対に存在することを、個々人の言語と声で伝える。滑らか、穏やか、ゆらぎ、とぎれ、枯れ、激しさと、それらの静止する沈黙に、聴く者は個々人として反応し、後にこだまをふと反芻するしかない。

私の父が農学部生だった一九六〇年代初め、研究名目で紹介状を貰って台南を訪れたら、年配の方達が甲子園出場経験を大層誇りにして日本語で盛んに話しかけられたものの、父は野球に興味がない為どうも困ったらしい。嘉義農林学校の元選手だったのだろう。最後まで存命だった選手も数年前に世を去ったのを想うと、ひたすら淡々と記録して伝える仕事の尊さを、ひりひりと感じる。

大橋愛由等

またも「スペイン内戦」の映画を観てしまったというのが正直な感想である。観ていてつらい映画だった。ドキュメンタリー映画なので、三人の写真家によって写しだされた一九三〇年代後半のスペイン民衆の顔が何度も写しだされ、時代を越えてわたしに訴えかけてくるのだ。

内戦は一九三九年に終了したといわれるが、スペイン社会はその後も長く混迷は続いた。フランコ独裁政権下で、人民戦線側についたひとたちを徹底して弾圧したことで、終わりなき内戦下にあったのだ。

私が初めてスペインを訪れたのは一九七六年。フランコが死んでから一年しかたっておらず、街には異常に多くの警官が立っていた。バレンシアのファージャ祭の際では、集団であることを恐れる警官たちによって、外国人でも容赦なく警棒でうちのめしていた。密告と疑心暗鬼が社会に蔓延していて、ひとびとの顔は決して明るいものではなかった。

映画は、スペイン内戦を撮影したロバート・キャパ、ゲルダ・タロー、デビット・シーモアが写した写真ネガが入ったスーツケースがどこかに保管されているとの伝説が語り続けられていたところ、そのフィルムが二〇〇七年にメキシコで見つかった経緯を追い関係者にインタビューしている。当時メキシコ政府は、スペインの人民戦線側の亡命者を積極的に受け入れていたのである。約七〇年ぶりにプリントされたその写真からは、敗者となった普通のひとびとが、国家や思想に翻弄されていく絶望がきざみこまれているのである。

「メキシカン スーツケース」

〈ロバート・キャパ〉とスペイン内戦の真実（トリージャ・ジフ監督、2011）

◆花火大会

岩脇リーベル豊美

いま独り花火の上がる埠頭の方向へ
車椅子も牽かずに吸い込まれて行く老女は
何年も毎日毎夜火病を起す連れ合いの介護で
二階建てアパートの一室に過ごしてきた。
父も世話になったデイ・サーヴィス送迎車の
挨拶が聞こえる週三日以外は見かけることもない。

その老女が今夏の花火大会の晩には
駐車場を横切って出る車道の前で何発か見上げた後
すぐに自室の多分配偶者のところへ戻ろうとするから
わたしは隣家の物干し台で麦酒片手に歓声を挙げて

音速では手遅れになることを危惧したのではないが
その都度見計らっては土星やぁとか今迄で最美ぃとか
光速映像の実況報告を送り続けていると
老女はやはり心奪われてその度毎に門まで引き返し
思いがけず腰を曲げたまま疾走感に溢れ海に向かった。
後ろ姿を見届けてから暫く様子を窺っていたが
その後の経過は計り知れなくなってしまった。
畢竟、昨年寡婦となった実母に騒ぐなと諌められたけれど
海鳴りが聞こえる海岸線まですら動きのとれない高等動物には
火を囲み団欒するように心情を通わせることが出来るのだ。

火とは野生動物が最も近付かないグリーフワーク
花とは四肢を失う両生類が常に愛でる静謐。
わたしの女性性が未来予知能力を授かり
死後の日常について花火を挟み語りあう
囲炉裏端に見立てた物干し台には
母港の少女が犠牲となった
魑魅魍魎の跋扈はいまだ見当たらない。

◆生命（いのち）

にしもとめぐみ

生き生きとほとばしる噴水の雫の美しさ
真っ直ぐに吹き上げる潔さよ
コポコポコポと流れる水音の楽しさ
繰り返し吹き上げる勢いの飽くことのなさよ
どのような形にも素直に流れゆく自由さ
生まれて間もない赤子は生命の喜びの渦だ
あどけないそのせせらぎは
私の耳元を楽しませて過ぎゆく
心地よいその命の水音よ
体中で喜び弾ける赤子の心を
今もお前は持ち続けているか
地を深く伸びる根のようにひねこび節くれだって
あちこちぶつかり曲がってこなかったか
収穫前の稲穂のように
実りを揺すらせ真っ直ぐに背を伸ばしてきたか
朝の海のように
五月の吹き渡る風のように
人に接してきただろうか
赤子よ　その透き通った瞳で
ひとつひとつ丁寧に日を重ねて
ひたむきで厚い人となれ

◆二つの塊

中堂けいこ

あれ？シーザーは誰に殺されたんだっけ。
オクタビアヌス？アントニウス？
ブルータスだよ　ブルータスお前もか！
詩はわたしの背後からのしかかり首に腕を回すのだ
それからぐいっと肘をしめる
喉仏の小さい骨がこきと鳴って
口から何かがとびだした
それはずいぶんちいさい二つの塊で
ころがりながらも白々と光ってみえる
いっそう首に力がかかってわたしは声をあげる

いや声は音にならず空気の最後の吹き出しのようだった
しかしわたしはちっとも苦しくなく痛みもないのだ
もう詩を書いてはならない、ふうな事を耳に呟かれる
ことばがつぎつぎと繋がりを断ち切り
殺されることとシーザーの周辺がごちゃごちゃするのだ
そうか詩は書いてはならないのか
妙に感心してうなずくと腕がゆるんだ
はっと首をすくめ腕にかぶりつく
もっと腕がゆるんでそのすきにわたしは走り出した
足元で頼りなくころがる二つの塊をつかんで
真っ暗な先へ走り出す　やった　逃げるよ
闇が濃くて足を前にだしても走っている実感はないのだが
手につかんだ塊を口にほうりこんで走る
それはぐにゃりと舌の上で平たくなり喉の奥へ溶けて消えてしまった
わたしはすっかり逃げおおせた
わたしはすっかり逃げおおせた

◆砂上の楼閣に住むもの

有時秀記

西方の砂漠から流れる砂が、わたしの夢の中に届き、その流砂はかの完全球体の幻影に向かってなだれうつ。とつぜん破裂した球体は四分五裂してオーロラの尾びれを伴って転がりはじめる。

北へ転がる円球は馬頭を形造って、望みなきにしもあらず、といななき、天蓋にその黄金の口舌を伴いながら端座する。東へ転じる楕円は飾り窓に変身して朝日を浴びるが、南に転身した球体はさらに破裂を繰り返しながら、壁面に、点々と点滅する星々をしたがえ、南十字星となって光を放ち続ける。西の方角には沈む夕陽を模したくれないの扉が開き、光の道が降ってくる。

こうして流砂の完成させた楼閣が宮殿のたたずまいでたたずむが、夢の中で閉じたまぶたの内奥に楼閣が像を結んだのは西の方に開かれた扉の前に、天から降りそそいだ光の道が通され、そのうえを歩いてゆく像の母が予視されたからだ。

そもそも流砂が夢の中に入りこんだのは、長く王冠を冠して砂漠に眠っていた男女一対の高貴な遺骸が超越した声を発して楼閣の住人となろうという意志を示したからだが、降りたった光の道を像の母は、砂漠に眠っていた高貴な二人の声の方へ、西の方へと歩みゆき、二人の超越した声と交感する。

流砂が夢中に楼閣を築いたのは、この交感のためであったのだが、こうした奇跡の邂逅と交感を取り結んだ楼閣の主は、像の流砂に住まう見えないもの、みずからの心身を放下し去って時を離脱した〈在りて在るもの〉だ。

とこうしている内に〈在りて在るもの〉の住まう楼閣は立ち消え、蝶が三枚舞い飛んでいるが、蝶たちは脱落した楼閣を心奥に構え、妖精の顔で微笑んでいる。

◆変容 焼肉弁当の哀しみ

富　哲世

それは神の死滅の日
ギャオギャオごわごわ何事か叫んでいるテ
　レビの前で
夕飯のコンビニ弁当をもぐもぐやっていると
戸口で囁く声がして
首のない牛がたずねてきた
「わたしの母はどこでしょう、ききたいこ
　とがあるのです」
「実はわたしも知らないのです」
遺跡の壁に刻まれた
星のめぐりも流れを変えた（後ろ手に弁当
　を隠して）
今は昔のことですし
夢の在りかも知らないので
わたしはただここにこうして
にこにこさ迷っているばかりです
さっき鏡も割れてしまいましたし
目刺しを焼くにも網はなし
山田時計店で買った時計の鳩も夕焼けの沖
　をめざして
とっくにどこかへ飛んでいってしまいました
そうですか、確かめたいことがあったの
で、もしそれが可能なら
母を買い戻そうと思って
ローソンにも
ファミリーマートにもだるま軒にも寄りま
　したが
（ひづめを削ってあげましょうか？）
――どうもあいすいません
――あいにく売り切れておりまして
慇懃無礼な応対に
またもし明日の朝入荷されても
それが母であるのかどうか
見分けるすべがもうありませんこれこの通り
わたしには首がありませんので
その牛肉が「なんだか気の毒でもあり（手
　鞠をつきたくもあり）
胸や股の黒ずんだ裂け目のあたりから
ぶらぶらと血の鎖を垂らしているその様が
　また
何故かとても滑稽でもあったので」
込み上げてくる思い出の数々にわたしは思
　わず窒息しそうになった
胃液と混ざりあった人参と肉の鼻を突く酸
　っぱい臭いが
読経のように喉いっぱいに広がり
たとえようのないわたしの淋しさは
月夜の死刑台か
秋の疎林にひとり佇む虹のようだった
ヒッグス粒子に絡まれた
もう肉の重たさなどたくさんこれからは
果物だけを食べることにしようか
睾丸もまた犬のえさになるのです
もうあなたは魚眼レンズの節穴からのぞく
　牧草地の丘の向こうの
気味の悪い独り言は隠すまい
後ろ手に隠した弁当のひしゃげた闇を
首のない鶏や豹変した豚の足が神話のように
やり場のない詩のことばとばっこしている
たとえ世界が洗いざらしの手触りのままに
きのうと同じに横たわっていたとしても
たった一度きりのあなたにもう気まずい隠
　し事はすまい
ナミアミダブツ
ナムアミダブツパパお帰んなさい
牛肉は表に立ち尽くしたまま裏山の
空には舟のように切り絵のように
群れる墓石が浮かんでいるよ
（覆された宝石）のやうな朝
がしまわれる
〈ものすごい〉夕暮れ

◆やわらかなフルーツ

月村　香

お友達との旅行のための準備をしてそ
ろそろ終わりますのにおかあさまはど
うしておそばにいてはくださらないの
ですかあらかあさんは胸にちらとは思
っていたけれどもお洗濯物を取り込ん
でたたんだらあなたのもとへ来ようと
思っておりましたのにあなたは言うな
んとなく寂しそうになんとなく寂しく
て不安ですのよといろいろと心配なこ
とがあってあははは大丈夫ですよでも
かあさまあの旅行カバンの中身がフル
ーツばかりだって知ってるの

連想ゲーム4

野口　裕

- 握
  - 水
    - 薬効
      - 錯綜
        - 固体・液体・気体と移ろう時間
        - の
        - 本性を
        - 知らずに
      - 鎮静
        - 走り出すのは
        - やはりまずいと
        - 理を説く人が千年に
        - なろうとする頃合に現れ
    - 衰亡
      - 輪廻
        - 大きく重くひどく手間のかかる
        - 車輪を動かす日々に耐えていれば
        - ますます喧噪がひどくなり
        - すっかり嫌になるのだが
      - 終末
        - 気持ちは切れずに
        - のんびりと
        - この世界
        - から
  - 体
    - 惨劇
      - 光航
        - 駱駝の
        - 乳を醸した
        - いびつな蝋燭を
        - ささやかに楽しみ
      - 響削
        - 泣いても鳴きつくしても
        - きりがないはずだと笑い飛ばせば
        - 理の中に淡い情がほんのりと
        - 岩塩の中の星のように
    - 物象
      - 究極
        - 吹き寄せに混じって
        - きらりと光り出す
        - ダイヤモンドを
        - 捨ててまで
      - 森閑
        - 夜を待ち
        - 浮き寝
        - に

（この星はやりなおします茸から小さな霧の吹き出すように）

◆いろといろ

大橋愛由等

*

たしかそれは夏の盛りのいつもの朝のごとく過ごして
いた時のことであり高音のひと声を残しそのまま虚(うつろ)に
なってしまってそれから嵐めいたものがやってきて日
照りもつづき風も三桁吹いたあと言い遺した片語(へんご)はな
かったのか探すあちらこちらであったが行方は厚い雲
が決壊して韓紅花(からくれない)色が流出するときまで待てばよい
ものかと

*

きっとかつて修道院が建っていた更地に向かい午前三
時に一番鶏と競うように鳴っていた鐘の音を間近に聴
きたくて出奔したのだろうと思うのだか更地は更地に
しかすぎず泪で変色した一斥染色(いっこんぞめ)の手巾を何度も振
ることで風の中に漂流している鐘の音を呼び寄せよう
としているのだろうかと肩肘をはりながら考えていて

*

尻尾だと司教は言ったのを思い起こし花瓶に飾られた
猩猩緋(しょうしょうひ)色の花弁がそろそろ盛りを過ぎようとして
いることを誰に語るべきか逡巡しているうちに尻尾と
いうのは対話すべき相手を撰ぶためのしるしなのだと
いう役目(やくもく)をその司教は示していたのかもしれないと気
づき今日の南風の匂いを確認しようと窓を開け

*

パタタをゆがきさえすれば解決の糸口がつかめるかも
しれないと深支子(こきくちなし)色のエプロンをきりりと結びなおし
たのはいいものの冥府(ハデス)に向かった詩人たちのためには
どんなハーブを加えたら美味になるのだろうかと鍋を
見ながら迷いつつ賢人たちの予定調和な対話よりも風
同士の対話を聴きたくなって

*

ようやく『ロートレアモン詩集』の中に茱のごとくに
固形化して錆鉄(さびてつ)御納戸(おんなど)色となった吐息の断片を見つ
けどれだけこれを受け入れていたのだろうかと自責し
つつもうすぐやってくる季節はホームを出てしまった
彷徨者には酷であるのに違いないなくせめて厳冬が来
る前に風の便りでもよこしてくれないかと立ちすくん
でいる

◆八つの方位からの声の無性格さについて

高谷和幸

言葉が語る。十月の海がいくつもの息をしているように、言葉が語る、そのイマージュを海底に沈んだ石に来たらしめ、聴従するかぎりにおいて、「言葉が語る」を聞かない権利でしか聴かないようにと、その聴法のみをたよりに言葉が語る。その傷痕の声を抱きすくめんと、「石が言葉を語る」ことがありえるだろうか？

*

わたしは
海の底を流れる、言葉の無い河を渡ろうとしていた。ひとびとの鳴り止まない耳石に誘われ。

*

「言葉が語る」　台所の片隅で忘れられた、それは二つに割れてしまった皿のイマージュだろうか。九月の白い花が揺れていた、一方で窓辺に五人の旅人が立っている。その恐ろしい距離感の中でわたしの名を呼ぶ声を聴いていた。リンゴのように落ちるからだの単純さで「言葉が語る」割れるような音で告げられる没自我。

*

シュレーゲルは明らかだという。それは一般にそういわれている、実際にひどくすり減ってしまっていわば判読不可能になってしまった声か、非常に複雑に入りくんで謎めいている声かであり、分断させられる沈黙においても、きわめて緻密な、文字どおりの意味では、「言葉が語る」声の無性格さというものは存在しない。

*

個人的理由のおもさで、おもさをはかる手のゆきちがいも一つの方位だろう。身についたものに運ばれる道が、「言葉が語る」時間の停止にまちぼうけの手の来歴がひろがり、手はそのあいだで手を忘れている。垣根もあったし、テーブルの上にあった、翠色のラベルのビールを好んだことも、すべてが個人的理由でできている。

*

「言葉が語る」赤い花が無残に野原にのこるとき、サンマの焼く匂いがして、言葉がゆたかにととのえられる。ひとびとの食卓に、六月に死んだあなたが席についた。ここからは「吹き替えでお願いしますわ」。口と声の動きがずれる、「吹き替えでお願いしますわ」、いつもながらあなたは、このあたりのあしらいがうまいよね。

*

言語のミッシングリンク。幻の石が語る言葉をどれだけわたしたちは探し回ったことだろう。「闇」を言葉が語る。意外に思われるかも知れないが、肉親とのあいだに「古代人の言葉」は見受けられる。鏡を覗きこむような同一性。「待ってなんかいなかったのに」と、鏡に映る人間が語る時を、一度は誰も経験したことがある。

*

言葉が語る。なによりもそれは語られたもののなかにおいて、自らを完結する閉ざされた環。多くの場合は彼の耳の中にある森の木々のあいだの陽が差し込む小さな広場に舞い降りる小鳥たちの獣声。言葉が語る。こんな環と環の交錯することもある。誰もが鳥籠の中から鳴かさずに小鳥を外に出すことはできないように。

◆耳をすませると

川田あひる

ふわふわの
パンを
自転車にのせ
ふるさとが
変わりゆくじかんを
走った
わたしの家は
貧しい人のための診療所になるという
祖父も元気で
成り上がり者も
過程にあった
わたしはパンを欲していた
妊婦にも分けないかまえで
ふわふわを

口に溶かす
誘惑に胸を満たし
自転車を走らせた
飢餓の
時代は　遠く
敗戦孤児でもあるまいに
わたしの執着は並ではなかった
しかし、迂回したゆえに
辿りつけないまま
パンはかびた
うまいかどうか
もったいないことをしたが
喰えなかった後悔はないことに
安堵し
月を　見上げた
耳をすませると
月面を横切る
渡り鳥の
声が
聞こえる

◆十三夜

上野　都

今になって二夜
まだ　足りないと

白銀の月暈に
ひたりと貼りつき
待つわけでもなかったはずが
煌々と　あの高みで

どこからどこまでが一夜なのか
解き放つ光も見えず
数える唄も知らず

古い詩集を開き
足りないものを閉じ込める
いつか　わたしが伏すかたちに

満ちるものが
わたしを消してゆくように

見えないままに巡りゆくかたち
沈みながら
昇りながら
わたしも抉れてゆくことを
薄闇に指折り契る

もう二夜　待てないほどに
言の葉で埋め尽くされた古い頁
無辺の詩集をめくる風が
最後の一行をなぞり

そして

闇を散らしながら
満ちてゆく影
二夜　まだ足りないと
月明かりを掬い
忘却をつなぐ転生のかたちで

◆客車

寺岡良信

霧はけふもまぶたの裏を流れて海へ出た
暁を過ぎるために
客車はわたしの眠りを載せて
湾に沿ふ

冬ざれの砂丘は
ほどけない
波の緊縛
風がうぉんうぉん泣く夜は
母を売れと
さう唆した後ろ姿は
何の影法師だつたのか

一輛また一輛
連結器を苛立たせ
潮騒の沖に立ち去る客車
放埒のまま
懶惰のまま
虚しく日を弄んできたわたしに
星座は檻の形をして
納棺を待つてゐる

黎明を蒼く
濡らしはじめる
雨―
旅立つわたしの
沈黙に沁み入る
さらに音なきものよ

南国の砂を恋ふ望みは
いつも
貧しい薔薇ほどにも
叶へられなかつた

詩人通りより／9

故郷についての―反時代的考察

岩脇リーベル豊美

郷里に帰ることを私は特に意識することもなく一時帰国と呼んできたが、ある同胞から「里帰りはどうでしたか」と訊かれて、恐らく珍しくもない言葉にあらためて再び意識が集中した。先月ゲルトルート・フォン・ル・フォールの『故郷なき者』の見直しを試みたが、故郷、故郷喪失とは『出エジプト記』を例にとるまでもなく旧来のテーマである。しかし「故郷」を哲学するという現象は世界構成考察の近代思想史で多く見られることであり、グローバル化があらゆる領域で謳われる21世紀という時代に及んで「故郷」概念およびその「喪失」現象の意識態を論ずるということ自体が既に時代錯誤という印象を与えるかもしれないが、一時帰国中にも多々この言葉を耳にして、２０１１年３月以来の故郷をめぐる言論について思うところがあった。故郷とはどこなのか。単に生まれ育った場所なのか。そこにいるひとを意味するのか。『民数紀』にあるような創造物の統計のことなのか。

再びドイツ語圏思想史からになる。人間存在のあり方や史観としての国家や祖国という概念とは別に、中世において出生地ないしは居住地というむしろ事務的、法的、地理的な意味のみを有して、懐古やポエジーといった内容を含んではいなかった「故郷Heimat」というドイツ語概念が思想的意味を帯びてくるのは19世紀のことである。そして故郷概念がロマン派の詩人によって発見されてからは、もっぱら親密性や庇護による安心そして郷愁Heimwehといった情緒的意味で現わされていることが多い。(Vgl. Michael Neumeyer: Heimat. Zu Geschichte und Begriff eines Phäomens. S.8f.) その背景には、産業革命やプロイセンによるドイツ統一にもとづく急激な社会構造の変化に対する不安定さと失われた原風土への憧憬といった心理が考えられるが、言い換えれば、従来の価値観、自己同一性、生存基盤というものが揺らがされるとき、その随伴現象として故郷への意識および反意識が高まるものと思われる。

ペスタロッチの直観教育、ヘルダーリンにおける自然との融合としての故郷、ニーチェの漂泊者の、エドアード・シュプランガーの郷土教育とナチスのイデオロギー、フッサールの危機感、第二次世界大戦前後のハイデガーや戦後のフランクフルト学派における故郷、アメリカ亡命中のエルンスト・ブロッホのユートピアとしての故郷、またドイツ語圏外では（このように語圏で区別することも意味がなくなりつつあるのかと思うが、そのことはまた書かせていただきたい）ノマド思想の展開など、その概念規定は至って二義的、むしろ多面的であるが、故郷に焦点を当てながら人間存在と世界との関連について思索がなされている。

１９８０年代末ごろから今世紀にかけては、社会主義体制の崩壊、冷戦終結、東西ドイツ再統一を経て、超国家的性格をもつ欧州連合の枠組みのなかで通貨統合などの経済のみならず、政治、司法、安全保障などの領域で量的にも質的にもヨーロッパの統合が進められ、それに加えて世界規模でのネット化の不断なる革新と普及も相携えてか、ヨーロッパに限らず、日常においてすら従来の遠・近、自・他、同・異等のカテゴリーが内包する判断基準や意味が大きく変化し、現存在としての人間を取り巻く環境を変えたと言われて久しい。そしてその新環境すら崩壊するようなことが人為的にも自然的にも（二元的に区別できるかもまた疑問だが）、次々ともたらされている。そこでは、どんな場所も最終的に故郷となり得るのであるが、逆に言うと、どんな場所でも人間にとって「故郷」となり得るようであれば、それは最終的には、事務的にも思考的にも故郷とは名づけられないということ（Vgl.Karen Joisten: Philosophie der Heimat–Heimat der Philosophie. S.11.）を示唆しているのではないだろうか。１９３３年にＮＳＤＡＰが政権を執ると同時に国外へと亡命したマルクス主義者エルンスト・ブロッホは『希望の原理』（１９５９）を次のように結んでいる、

認識感覚にあるそのすべては人間が本質的に欲するものの総体である。そのため、あらゆる白日夢、希望、ユートピアそのものの同一性が暗澹たる根底に横たわっているのと同様に、それは具体的なユートピアを載せている金地でもある。根拠付けられた白昼夢はいずれもこの二重的根拠を故郷とみなす、つまり故郷とは未発見の、しかもこれまでに成立したあらゆる経験において経験される「未だ経験されぬもの」なのである。（Ernst Bloch: Das Prinzip der Hoffnung. Werkausgabe Bd.5, Kap.1-32. S.368.拙訳。）

里帰りは未知への回帰ということなのだろうか。未来で完了しているものへの回帰と考えてもいいだろうか。

◆海山のあいだで

木澤 豊

虚空を歩くように
黒い服の大きな目の男が　ごろ石の浜をやってきた
たしかな足取りだった
すれ違ったはずみに　身体が入れ替わった気がする

遠く山影が　夕暮れに紛れた

振り向く街の意志
倉庫の並ぶ路地に
なめらかに黒い海が流れて　わたしは誰だったか
どうしても思い出せないのは
明日の記憶だから　だろう
比喩として生きてきたんだなあ　とおい

山の端を裂く　峠の細い道を歩く人影は
わたしの魂の片割れ　あいつは　たしか
海いろのガラスのむこうで　古本を立ち読みしていた

峠の道はそこで　断ち切れていた
断崖の下は漁港で　あの男は

いまも
山と海の隙間
彫刻したことばとことばの垣間を歩いているか

かもめが暗い海に突きささって
そこだけ　ゆらゆら　虚空を乱し
かもめホテルの壁の文字が光りはじめた　夕方
わたしを迎えるように　窓から
海が入ってきた

この町の駅前の路地に「かじか」という名の居酒屋があった
むかし長屋の一軒で　六人ほど座れるカウンターのむこうで
「蛙じゃないよ　魚の名まえ」
と丸刈りのマスターが壁の大きな魚拓を指した
久し振りに訪ねたら
「度重なる不幸で　やむなく閉店いたします
　予約いただいた平目さま　ほんとうにもうしわけありません」
　と
端正な文字の張り紙が　ほんのいまのように
引き戸に張ってあった

海山の隙間は

夕暮れても　行くところなし
空をみるのは
わが箱に　手を突っ込むようなものさ
指先に　空が触って　な

◆あとずさる

福田知子

かなしみは　もう
地に堕ち　血にまみれることはなかったので
しそう橋を渡る風にまじっている
コウコウ　コウコウ　と
ニスでうすめられた時間と空間のあいだ
鴨や　家鴨や　鳩や　鷺の羽ばたきのうちを縫って

閉ざされ　打ち固められた逆さ十字の古い扉
ゆるゆる流れる濁った用水路はゆみぞと呼ばれ
洗濯物や　うなぎの仕掛けや　欠けた茶碗がそこにある
小さな橋の袂には　打ちつけられた板が朽ち果て
崩れおちるように佇む家がある
生垣の奥から緑の眼をした猫が　だれか来るのを待っているのか
こちらを伺っては小枝をしゃらしゃら鳴らし　あとずさる　を繰り返す

テルユキちゃんも
ユキエちゃんも

トランプを夜更けまでしていた朝があった　たしかにここで
数学Aの教科書をひらき「あした、テストなんだから」って
夏休みなのにテスト？　ってことは・・・あ　追試なんだ　テルユ
　キちゃん
ユキエちゃんはテルユキちゃんが好きだから朝まで帰らない

この家にあるのは
台所とトイレとエイコおばちゃんのいつもいる居間とテルユキちゃ
　んの屋根裏部屋
裏の石積みの崖の前には　八つ手の木
夜になると風にうなって　コウコウ揺れた
お化けのようにみえてあとずさる

あの夜は　猫と　八つ手と　テルユキちゃんと　ユキエちゃん
いっぱいちからをだして空をめぐっていたなぁ
もう血にまみれることはないけれど　他人のようにあとずさる

神戸詞（うた）あしび

75-2013.10.27　大橋愛由等

「〈八月のお知らせ〉情報と作品、いつもありがとう。
（ロルカ詩祭に）行けなくて残念です。
ご盛会を祈念いたします。
皆さんに宜しくお伝え下さい。」

八月一四日に着信した詩人・鈴木孝氏からのメールである。私は毎月、「Mélange」読書会・合評会の開催お知らせを中心に関西の詩に関するイベントを紹介するメール通信を全国の詩友に一斉送信しているのだが、それに対する応答である。ほぼ毎回こうして返事をいただくばかりか、合評会に参加した詩作品をあらかじめメールで詩友たちに伝えるその内容についても感想を寄せられ、いつも深い関心と愛情を示してくれていた。

そればかりではない。姫路で行われた「カフェ・エクリ」で私がフランスの海外県であるカリブ海マルティニーク島で活躍した詩人エメ・セゼールについてを発表した際には、わざわざ愛知県から駆けつけてくれた（二〇一二年二月）。私よりはるかにセゼールについて詳しくかつ代表を務める詩誌『宇宙詩人』ではセゼール作品を翻訳している専門家でありながら、足を運んでくれたことに対して、驚きかつ感動したものだった。

この時じつは術後間もない時期であり、本人は自ら言明しなかったものの、いのちの終わりを自覚していたのである。

鈴木孝氏（『鈴木孝詩集（新・現代詩文庫98）』（土曜美術社出版販売））より

詩人がいのちの終わりを意識するとき―

過ぎ去ったことは　もういい　それまでだよ　これからのことを語ろう　そうか　それまでか　思い残すことも　言い残すことも　言ってみろ　と言われればとくになにもない

七十五年か　もうそろそろなんだな　そのほうがいいに決まっている　この女に取り残されたら　たいへんなのだ　はい　ありがとう　お願いします　どういたしまして　で生活している

「死から」と題されたこの作品は鈴木氏のありていな境遇を吐露した作品である（「宇宙詩人16号」、二〇一二年四月発行）。自らの人生を振り返ったこうした言辞は、含羞の人であり発語する言葉に対して厳格であった鈴木氏みずから語ることはなかった。

女と　ヨーロッパで一年ほど暮らすなんて　もう過ぎ去ったことだ　たばこ　あるこーる　家事は　もうしなくていい　はい　ありがとう　お願いします　どういたしまして　死者のことば

死んだ個体が語るのだ　生者の語りが　時間を交錯する　過ぎ去った姿が　行く先にみえる　これからのことば　固体になって　死から発散する　生きている死者よ　死んでいる生者よ　黙せ

死への諦観の中に生きていた鈴木氏。詩を愛し、詩に生き、自らの人生を詩に同期して歩んだ軌跡について深く自覚していたことであろう。冒頭のメールをいただいた一二日後の八月二六日、心臓発作により逝去。享年七六。
おおいなる詩人の先輩に、合掌。

詩と評論
月刊『Mélange』VOL.86
めらんじゅ

2013年10月27日　通巻86号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1　2F
編集人／大橋愛由等〈『Melange』同人〉
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円（税込）